名古屋学芸大学短期大学部　研究紀要　第８号　2011 : 34-42

《論文》

英語圏の歴史と言語*
―オーストラリア英語の場合―

A Study of History and Language of the Early Australian English

加　藤　直　良**
KATO Naoyoshi

Abstract

The purpose of this report is to make clear the history in early Australia and of Australian English. In 1788, many convicts were transported to NSW, which was the first place that Britain decided to send them there. In those days British criminals were transported to colonies in America, but the Americans declared independent. As a result of this, there were no places to imprison them. They were the founders of the English colony and Australian English. The varieties of English spoken by the early British and Irish immigrants promoted development and foundation of Australian English. There was much influence of Irish English upon it.

序論

英語を第一言語とする国は多々あるが、一国の中で、様々な国の言葉が何の違和感もなくまた誰一人として躊躇する様子もなく使用されているのもオーストラリアと言う国の大きな特徴の一つと言える。シドニーを散策していると、必ずと言っていいほど、数人の外国人より道や建物の所在について尋ねられたりする。ある時はドイツ語訛りであったり、またあるときはフランス語訛りだったりするわけである。これは多文化民族の集まりで構成されている国においては実に普通の光景であると言っても過言ではない。

多様なオーストラリア大陸・人が誕生するに至った経緯と歴史、その根底にある様々な問題、並びにオーストラリア英語の特徴について論じてみる。オーストラリアの歴史をひも解いてみると、その大陸は当時、多くの国々が捜し求めて航海した自然界の宝物や自国に多大なる利益をもたらす品々、それが故に、開発の発端となるようないかなる材料も見出すことのできない不毛の地として位置付けられていた歴史がある。当時のヨーロッパからみると単純にはるか遠くに位置する広大な大陸、さらにその大陸には開発や探検の意欲をそそる物質は存在しない、全く魅力のない大地として片づけられていたのである。そして囚人の流刑の地としてその歴史は始まるのであった。

＊　2010年12月10日受理
＊＊　名古屋学芸大学短期大学部

1．オーストラリアの歴史概観

1）ヨーロッパの大航海時代

ヨーロッパの大航海時代の到来とともに、各国が挙って自国に益をもたらす物質を求めて探検航海し始めたこの時期に、大陸の存在こそ知れ渡っていたにもかかわらず、その大陸に何らかの価値ある物の存在を見出せぬままに長い年月が過ぎた。オーストラリア大陸の見るからに広大な砂漠が大部分を占める大陸にあって、その自然界のもたらす脅威に立ち向かおうとする勇気ある国は当初は皆無であった。スペイン、オランダ、イギリス、フランス、ポルトガルなど、大航海時代に勢いのあったヨーロッパの国々、特にジャワに東インド会社を設立したオランダは、A. J. タスマンを調査のために派遣した事実がある。その結果、彼は現在のタスマニア島を発見、さらには現在のニュージーランドにも到達し、派遣の最大の目的であったオーストラリアの全貌、特に大半の海岸線を垣間見る事になった。しかしこの大陸が不毛の地であることを再度確認するに留まった。

2）イギリスの進出（James Cook の足跡：特にオーストラリア関連）

J. クックの三度に亘る太平洋の航海は、それまで不明であった太平洋上の島々の存在を明確にしたものであった。第１回目の航海は、金星の蝕の観測のためにタヒチへ派遣されたものであったが、目的はそれだけではなく、もっと大きな南方大陸の探検調査があった。この航海においてニュージーランドの詳細を探検し、北島と南島の間をクック海峡と命名している。その後、西進し、現在のタスマニアを経て、オーストラリアの東岸に達する。東岸は James Cook がヨーロッパ人で最初の発見者となる。この時、海岸に先住民（アボリジニー）を見つける。ボタニー湾に上陸し、New South Wales と命名し、イギリスの領有を宣言した。オーストラリアの東岸を北進し、チモール島経由で、イギリスに到着する。第２回及び第３回の航海で、太平洋の全貌が明らかにされた。

3）オーストラリアへの入植（流刑地として）

1788年大勢の囚人を乗せた船団がイギリスよりオーストラリアのボタニー湾に到着、そこからポートジャクソン湾に移動し、上陸を果たしている。イギリス政府は自国にあふれかえる囚人の流刑地として送り込んだのであった。またアイルランドからは1791年最初の囚人が到着した。囚人を乗せた船は相当数オーストラリアへ到達したことが様々な資料により明確である。その結果として、オーストラリアは囚人であふれかえる、秩序の欠いた大陸であったと推測する事は一般的である。確かに先住民（アボリジニー）に対する暴虐はあり、また移民の持ち込んだ負の要因（病気や暴力行為など）により、極端に先住民の人数は激減していった。

2．移民の特徴

1）移民として入植した囚人の特徴

オーストラリア大陸の基礎を築きあげたのは、紛れもなくイギリス本土から送られてきた囚人であった。1830年までは、約70％が植民地に送られた囚人が占めていた。植民地の住人の70％が囚人の国とは、一体いかなる状態が予想されるか。犯罪の多い無秩序化がもたらす日々の不安は相当なものであったであろう、また犯罪者による国づくりは困難極まりないと予測できる。しかしながら移送された囚人の犯罪歴を確認してみると、果たしてこの点についてはどのようなものであったのか、さらには当時何よりも避けたいと願った南大陸への移送がいかなる基準で実施されていたのか、調査を進めていくうちに、多くの疑問が生じてくる。イギリス本土からオーストラリアに移民として渡ってきた囚人の特徴、彼ら、彼女らは本国でいかなる罪を犯して犯罪者となり、この大陸

に移送されてきたのか。イギリス、アイルランド、スコットランドから送り込まれた囚人の詳細な犯罪歴並びに入植年を次のウエブサイトで確認することができる。
サイト名：Convicts to Australia
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/index.html>
　このウエブサイトでは、オーストラリアに住む人々が、自分達の祖先について、調査する一つのデータ資料として提供している。これらのデータが、最終的に確定したものではないことまた定期的に情報が付加されていることを断っている。それぞれの項目には、囚人に関する様々なトピックが詳細に記載されている。各項目の内容を以下に記してみる。

What's New: 西オーストラリアに送りこまれたイギリスからの囚人。
Timeline: オーストラリアに囚人を送り込むことになったその経緯などを年代順に解説。
Bound for W.A: 1850年から1868年に至る西オーストラリアへ送還されたイギリス、アイルランド、スコットランド並びに軍の囚人記録。
Convict Tales: 各囚人の個人情報。
N. S. W. Women: イングランド、スコットランド、アイルランドより、New South Wales に送り込まれた女性囚人記録。
Convict Ships: 第１、第２、第３船団により England から送り込まれた囚人記録。[1)]

　Convict Ships の項目を選択してみると、更に次のような分類項目が確認でき、それぞれ詳細なページへと検索が可能である。
Convict Ships to:
1. NSW (1788-1800)
2. NSW (1801-1849)
3. Norfolk Island
4. Tasmania
5. Queensland
6. Victoria
7. Western Australia [2)]

２）NSW（1788-1800）

　NSW (1788-1800) を選択してみると、最初の第１船団 The First Fleet 1787-1788 の船名が出てくる。そして The Second Fleet 1790, The Third Fleet 1791 へと続く。
NSW の Port Jackson へ到着した当時の船名、その船の製造年と大きさ、出港場所、到着港、航海期間、死者数などが確認できる。
　The First Fleet (1787-1788) より確認できる点を列挙してみると、次のようになる。
Vessel: Year → Built → Tons → Arrived → Port → Sailed → From → Days Embarked → Deaths の順番で表記してある事を断っておく。ここでは４船のみ記述するにとどめる。

Alexander: 1783, Hull, 452?, 21 01 1788, NSW, 13 05 1787, Portsmouth, 251, 195
Charlotte: 1784, Thames, 335?, 22 01 1788, NSW, 13 05 1787, Portsmouth, 252, 88(M) 20(F)
Friendship: 1784, Scarborough, 274?, 21 01 1788, NSW, 13 05 1787, Portsmouth, 251, 76(M) 21(F)
Lady Penrhyn: 1786, Thames, 333?, 22 01 1788, NSW, 13 05 1787, Portsmouth, 252, 101(F) [3)]

第１船団リストより、出発日、出発港、到着日、到着港などがほぼ同一であることが分かる。第２船団リストより、出港年月日（1790年１月19日）、出港地（Portsmouth, England）が確認出来る。第３船団リストより、1791年３月27日出港、出港地（Portsmouth, Plymouth, Cork）が確認できる。

更に船名を選び調査を進めると、当該船に乗船した囚人達の詳細が明記されているのが確認できる。上記にも記述した船名 Alexander を選択してみると、乗船者名が多数列挙されているのがわかる。下に船名とそこに乗船した囚人名を記載した。数名その犯罪歴並びに年齢などを確認してみると、彼らは非常に若い青年達ばかりである事と、囚人として当時一番過酷な地として知られていたオーストラリアに送られてくるには余りにも犯した罪は重大とは思えない軽犯罪ばかりであると判断できる。ほとんどが窃盗の罪により送られたのであった。

Alexander, arrived NSW21/1/1788 (1st Fleet)
George GESS (GUEST), John MARTIN, John RANDALL, William SALTMARSH,
John WILSON
Alexander, arrived NSW1790
William DAVIS
Alexander, arrived NSW20/8/1806
Mary CLARKE, Soloman WISEMAN [4)]

上記リスト中、George GESS, John RANDALL, Mary CLARKE を例にあげてみると次のようになる。（下線は筆者による）

George GESS (GUEST), late of Prestbury, Gloucester. aged about 20 years, was sentenced to death on the 4-3-1784 on two counts of theft. First 10 live pigs, second a chestnut mare. Reprieved to Transportation for 7 years. 7-1-1790 ordered by Supply to Norfolk Island. Married 5-11-1791 Mary Bateman (1775-1829), buried St. Lukes Cemetery, Liverpool, Sydney. (Second Fleet “Lady Juliana”). Their children Sarah, George, John, Edward, Mary & William (my line). On 2-10-1805 arrived Hobart, Tasmania. George died 23-5-1841, is buried St David’s Cemetery, Hobart. Note: George received several Floggings. [5)]

John RANDALL was tried at Manchester 1785 for stealing a silver watch chain, was then sent to the Ceres Hulk, then 1786 delivered to the Alexander for transportation for 7 years. He remained in the country. He states his birth place to be New Haven Conn. Nth America. 21/2/1788 married Ester Howard ‘Lady Penryn’ (1788). She died 11/10/1789, no issue. He then married Mary Butler ‘Neptune’ (1790). 以下省略 [6)]

Mary CLARKE was 22 years old when she arrived in Sydney. She was tried in the Middlesex Court on 5 July 1805, for theft of some small items of clothing and linen. What was proved against her was about one shillings worth, though she was accused of more than this. [7)]

３）NSW（1801-1849）

アイルランド人の囚人データを見る事ができる。このサイトのタイトルは、
Convicts and Convict Ships Sent to NSW (& Tasmania & Norfolk Island) 1801-1849[7)]

船名 Anne I (Luz St Anna) を選択すると、そこには Irish Revels to Australia 1800-1806 と記載されており、選択すると別サイト[8)]へ移動し、囚人の詳細がデータベース化されている。目次は次の通り。

Irish Convicts and Databases

・Irish convicts to NSW 1788-1849
・1798 & 1803 Rebellions
・Wicklow United Irishmen 1797-1804 [9)]

これらの項目から Irish convicts to NSW 1788-1849 を選択すると、様々なリスト項目が記録されている。データベースには、次のような分類事項により囚人を選別している。

・Irish State prisoners,
・convicts who were tried in Ireland,
・convicts who were tried outside Ireland whose native place was in Ireland,
・Irish military men who were tried inside or outside Ireland whose native place was in Ireland, and
・a few non-Irish convicts arriving on Irish convict transport ships. [10)]

List of Ships Carrying Irish Convicts から1788年に到着した Alexander, Charlotte, Friendship, Lady Penrhyn, Prince of Wales, Scarborough の船名が確認できる。一覧より船名 Friendship を選び調査してみると、囚人の詳細が記録されており、いかなる罪状で逮捕され、オーストラリアに送還されたか掌握できる。３人の名前が記載されており、特記すべき特徴を以下に述べてみる。

３人の囚人の年齢が25歳、26歳、27歳と実に若い青年、生誕地がアイルランド、罪状が３人とも時計、上着などの窃盗罪である。[11)]

アイルランド人の囚人は、アイルランドと言う国の不幸な歴史そのものを象徴するような囚人の集まりであったと言っても過言ではないであろう。入植が盛んに行われていたこの時期、18世紀はアイルランド人にとっては、不安と苦悩の時代であった。常に何かあるいはどこかの国の支配下に置かれる、また圧力がかけられるという状況にあった。さらに18世紀は度重なる飢饉に苦しんでいた世紀でもあった。市民の不安、生活の貧困、度重なるイギリスからの抑圧などにより、アイルランド人も多々紛争を蜂起した。それ故に、蜂起したアイルランド人が捕らえられ、多数が囚人の身となり、オーストラリアに送り込まれたのであった。年齢的にも非常に若い民衆が多かったのも事実である。1793年から1802年までの囚人中４割がアイルランド人で、しかもほとんどがカトリック信者であった。当時のイギリスにおけるカトリック信者が１割にも満たない事から比較しても、いかに宗教がらみの逮捕や紛争が多かったか想像のつくところで、それが原因で、多くのアイルランド人がオーストラリアに流されたのであった。

その後1850年代では、自由移民も加わりさらに金鉱脈の発見もあり、移民の人口は増加し続けることになる。オーストラリアが移民の国とし位置付けられた政策上の施行、あるいは改定などもあり、現代のオーストラリアを形成していくことになる。

３．アイルランド語の影響

入植がはじまった初期、イギリスは増え続けるロンドン近郊の囚人、ならびにアイルランド系囚人の留置場所を模索していた。アメリカの独立により、囚人をもはやアメリカへ送り出すことは不可能になり、結局不毛の地、自国に益をもたらさないと判断されたオーストラリアに送り込むことになった。オーストラリアには先住民（アボリジニー）が先に平和な生活を営んでいたが、イギリスの植民地化で、生活は一変することになった。

このように初期の、つまりはオーストラリア英語の形成期に入植した、正確には送り込まれた民族は言うまでもなく多数のアイルランド人であった。彼らがオーストラリアという国の建国に大きな礎となったことは間違いのないところである。オーストラリア英語にいかなる影響を与えたか、アイルランド語の及ぼした影響はいかなるものであったか。全体の総数が圧倒的に他民族を圧倒し

ていたという状況下で、一般的には、アイルランド語が中心的な影響をもたらしたと、推測することは容易である。しかしながら先人の研究者は、必ずしもそうではなかったと論を展開している。これも当然、推測の域を超えるものではない。当時のアイルランド語の影響とみなされる語、あるいは用法が確認されるにせよ、一定の確固たる法則や定義を導き出すものではない。移送されてきた民が中低層階級であり、労働者階級の出身者であったことが、オーストラリアで言語上のリーダーシップを取るまでには至らなかったのである。アイルランドでは、アイルランド語が17世紀に至るまで、ほとんどの全域で使用されていた。17世紀以降スコットランドからアイルランド北部に多数の新教徒が移住してきた。そのためスコットランド英語をアイルランド北部の英語の起源と定める事が出来る。一方アイルランド南部の英語、ダブリン市内とその周辺地域で話されていた英語は大部分がイングランド西部および中西部地方からの導入であった。[12)]

オーストラリア英語に借用されたアイルランド英語の用法として、山崎著「オーストラリアとニュージーランドの英語」のなかで、Trudgill に基づき、文法面に見られる影響について論じている。数例引用してみる。

1）二人称単数代名詞 you

二人称単数代名詞 you が複数代名詞 yous, youse のようにアイルランド口語英語において区別していると記述し John Harris より引用している。

> So I said to our Jill and our Mary: 'Youse wash the dishes.' I might as well have said: 'You wash the dishes', for our Jill just got up and put her coat on and went out.[13)]

また Australian English Usage には yous, youse について 'This is a slang form of you, often addressed to a group of people. The spelling yous suggests that it's plural, on the analogy of regular nouns.' 更に 'In Australia it's heard in casual exchanges in both metropolitan and country speech, but still associated with a shortage of education.'[14)]

さらに From English in Australia to Australian English（Clemens 2005）において次のように述べている。

> It is the Irish who spread *yous* to English speaking countries all over the globe (Wright (1905) and Beal (2004: 207f)). The cause of this spread are the social and economic disruptions of Irish society in the 19th century which resulted in a mass exodus to the industrial centres of England and Scotland, to North America, Australia and elsewhere. Therefore *yous* can be found not only in Ireland, but also in Liverpool, Glasgow, New York, Chicago, Boston, Sydney, etc.[15)]

2）副詞の but

オーストラリア英語では、副詞の but を句末ないしは文末で though, however と同様に用いる。[16)] Australian English Usage では次のように記述されている。'Note that in spoken Australian English, **but** sometimes occurs at the end of a sentence:

I didn't want to go, but.

This usage is exactly like the more generally accepted one with though:

I didn't want to go, though.'[17)]

3）北アイルランド英語の Whenever

北アイルランド英語に特有の用法として、Whenever が When と同じ使い方をする例がある。

Whenever は何度も繰り返される事象「～する度に」を表現するのであるが、北アイルランドの用法の一つに When と同意味で使われる場合がある。オーストラリア英語にもこの意味での用法がみられる。Whenever my baby was born, I became depressed.（赤ん坊が生まれた時、私はがっかりした）[18]

アイルランド英語のオーストラリア英語に及ぼした影響、成果を述べてみたが、アイルランド英語、特に北アイルランド英語は相当な影響をオーストラリア英語形成に及ぼしたと言っても過言ではない。勿論イングランド英語、先住民の言葉、アイルランド英語、スコットランド英語など様々な英語がお互いに影響しあいオーストラリア英語を形成したのであった。

4．オーストラリア英語に及ぼしたアボリジニーの影響

オーストラリアの先住民であるアボリジニーはヨーロッパから1788年に白人達が上陸するまでは、原始的な生活を営んでいた。その数も30万人とも言われていた。しかしながら入植者達のもたらした様々な病気、虐待、侮辱などにより、莫大な数のアボリジニーが死んでいったと言われている。彼らの言語はいかなる影響をオーストラリア英語に残したのか。彼らが当時使用していた武器や道具類が借用語として確認されている。彼らの住んでいた簡素な住居、日常生活、また壮大な自然界を起源とする語彙などが借用された。

借用語数をまとめたものが次の表である。表は Clemens W. A. Fritz: *From English in Australia to Australian English*. p.86より引用したものである。

Year	1800	1815	1830	1845	1860	1875	1890
# of new words	48	4	12	117	20	26	56
Year	1905	1920	1935	1950	1965	1980	
# of new words	37	19	26	14	4	8	

表　アボリジニーからの借用語数[19]

結論

英語を First Language とする英語圏の中で、オーストラリア大陸・英語を中心に調査検討してみた。1788年に最初の入植者がオーストラリア大陸に上陸し、ここから新たな歴史が展開されることになった。イギリスからの囚人が大陸形成に、また言語形成に中心的な役割を演じた事は間違いのないところであろう。当時イギリスから送り込まれた囚人達の多くが、若くて体力的にも充分肉体労働に耐えうる状況にあった。このような若者が大陸での建築物や土地の開発に大いに活躍した事は想像できる。当時の大陸はいわば周りを海に囲まれたフェンスのない牢獄であり、脱走するにもその術がまったくなかったわけである。また囚人の罪状は非常に軽度な、例えば、窃盗などが中心であった。このような罪で送り込まれた囚人は、手の付けられない野蛮な集団ではなかった事が、明確であり、秩序のある日々の暮らしを想像できる。このような理由から、新大陸の構築に大きな役割を演じたことは明白である。

オーストラリア英語の基礎となり、多大なる影響を与えた言語は果していかなるものか。先人達の多くの研究書をひも解いてみると、確固たる証拠を提示しているものは確かに少ない。イギリス人の入植が事実である以上、イギリス英語の影響は多大なるものがあったと推測することは容易で

ある。コックニーイングリッシュが大きく影響していると論じている研究者もいる。反面当時囚人として送り込まれたアイルランド人、彼らの総数は、はるかに他の入植者の数を上まわっていたのは事実である。しかしながらアイルランド人・語の影響は微々たるものであったと、述べている研究者も少なくはない。確かに、アイルランドからの入植者の当時の自国における地位というものは、低層、下層に位置する人達で、この様な状況にあった民族の言葉が、果たしてオーストラリア英語という一言語を成立させるために、強い影響をもたらしたか、というのが彼らの言い分である。推測の域を離れることは不可能ではあるが、現在のオーストラリア英語は別問題として、当時の英語に関してアイルランド人・語の影響は何よりも大きかったと思うのである。アイルランド語そのものが宗教上の影響、スコットランド英語の影響など様々な観点において揺れ動いた言語であることも事実であるが、それにしても無限の大陸の言語形成に大きな影響をもたらした事は事実であろう。

引用文献

1）Convicts to Australia
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/index.html>

2）Convict Ships to Australia
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/ships.html>

3）Convicts and Convict Ships Sent to Port Jackson NSW 1787-1800
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/shipNSW1.html>

4）Alexander, arrived NSW 21/1/1788 (1st Fleet)
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/stories.html#alexand>

5）Convict Tales (1)
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/con192.htm>

6）Convict Tales (2)
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/con207.htm>

7）Convict Tales (3)
<http://members.iinet.net.au/~perthdps/convicts/con275.htm>

8）Welcome to the Mayberry Home Page
<http://members.pcug.org.au/~ppmay/>

9）Irish Convicts and Databases
<http://members.pcug.org.au/~ppmay/>

10）Irish Convicts to NSW 1788-1849
<http://members.pcug.org.au/~ppmay/convicts.htm>

11）Irish Convicts to New South Wales 1788-1849
<http://members.pcug.org.au/~ppmay/cgi-bin/irish/irish.cgi?requestType=Search&ship=Friendship+(1788)>

12）Peter Trudgill & Jean Hannah: International English p.98. (5.2. English in Ireland.)

13）山崎真稔著 : オーストラリアとニュージーランドの英語、p.116.

14）Pam Peters: Australian English Usage, Cambridge Uni. Press, p.878.

15）Clemens W.A. Fritz: From English in Australia to Australian English, p.205.

16）山崎真稔著：オーストラリアとニュージーランドの英語、p.117

17）Pam Peters: Australian English Usage, Cambridge Uni. Press, p.109.

18）Peter Trudgill & Jean Hannah: International English, p.100.

19）Clemens W.A. Fritz: From English in Australia to Australian English, p.86.

参考文献

Edgar W. Schneider (ed.): Englishes Around the World 2, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Pam Peters: Australian English Usage, Cambridge Uni. Press, 2007.

Peter T. & J.K. Chambers (ed.): Dialects of English, Longman, England, 1991.

Peter Trudgill & Jean Hannah: International English, London, 2002.

P.W. Joyce: English as we speak it in Ireland, wolfhound Press, Dublin, 1991.

A.G. Mitchell & Arthur Delbridge: English in Australia, 1965. 沢田敬也他訳：オーストラリアの言葉、オセアニア出版社、1998

Geoffrey Blainey 著、長坂寿久訳：距離の暴虐、サイマル出版会

加藤和光：文化の流れから見る英語、三修社、1996

川北稔編：イギリス史、山川出版社、2006

西川長夫他著：多文化主義・多言語主義の現在、人文書院、1997

藤川隆男著：オーストラリア歴史の旅、朝日選書、2001

竹田いさみ他：オーストラリア入門、東京大学出版会、2007

森本勉編 : オーストラリア英語辞典、大修館書店、1999

山崎真稔著 : オーストラリアとニュージーランドの英語、玉川大学出版部、2009

山本真鳥編：オセアニア史、山川出版社、2000